

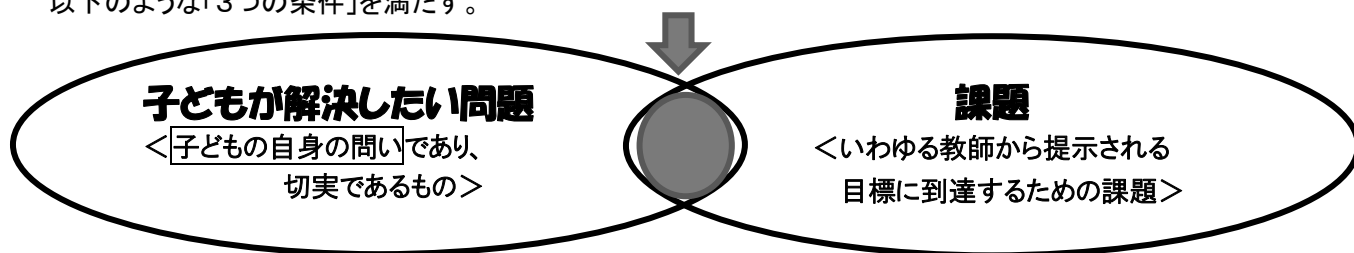
テーマ「ひびき合う 三の丸の子どもたち」

研究課題…子どもが解決したい問題をもち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成
手だて……子どもの思いや願いを見とった単元構想と授業づくり

「子どもにとって解決したい問題が切実になった時、ひびき合うだろう」という考えから、
その学習は子どもにとって問題が本当に解決したいものであるかどうか、それに基づいてひびき合っているかどうか
に視点を当て、「ひびき合う 三の丸の子どもたち」をめざしている。

子どもが解決したい問題とは・・・

子ども自身がある事象に対して「問題である」「なぜだろう?」と感じ、その解決を何とかして図ろうとする意思や
や関心を示す事柄である。つまり、その事象に対して主体的に向き合う問題であり、子ども自身の問いである。単
元の中でどんどん問題意識が深まり、解決への熱意や切実な思いも増している状態であるとよりひびき合うだろ
うと考える。この問題はいわゆる教師から提示される目標に到達するための「課題」ではなく、その課題が子ども
の解決したい問題と化している状態であることをめざしている。(つまりベン図の真ん中の重なりの部分)そして、
以下のような「3つの条件」を満たす。



・研究では問題を追究する過程を授業で実現する。

問題が切実になりうる3つの条件

- ① 事実に基づく問題←(いつも確認するもの)
- ② 多様な、あるいは異質な考えや立場に出会う・知ることができる問題
- ③ 葛藤を内にもつ(＝モヤモヤした自分の考えがはっきりしない状態)
単純に(どうしたらよいか)自分で判断できない問題

問題が切実になるほど ひびき合う

ひびき合う姿とは・・・

ひびき合い＝みんなで関わり合いながら、よりよいものをめざし、
よりよいものを築き上げていく姿。
目に見える、または目に目ないけど、単元のねらいにより近づく心の変容(「強化」「変化」「統合」)

＜「ひびき合う」の表記について＞

「響く」という言葉は、「音が回りに伝わって聞こえる」「音が後まで残る」「振動が伝わる」「悪く影響する」「感動を
与える」「ある特別な感じに聞こえる」「評判が広く伝わる」(三省堂国語辞典より)などの意味を表す言葉である。
しかし、ここでは、子ども同士が、何か一つのことに向けてよりよい物を築くために、言葉をつなぎ、またそこから
重ね合わせたりしながら、単元のねらいに近づき、心を変化させていくことを「響く」という言葉で表している。「音

の振動」「影響」などの意味とは区別するため、本研究では「ひびき」とひらがな表記で表す。

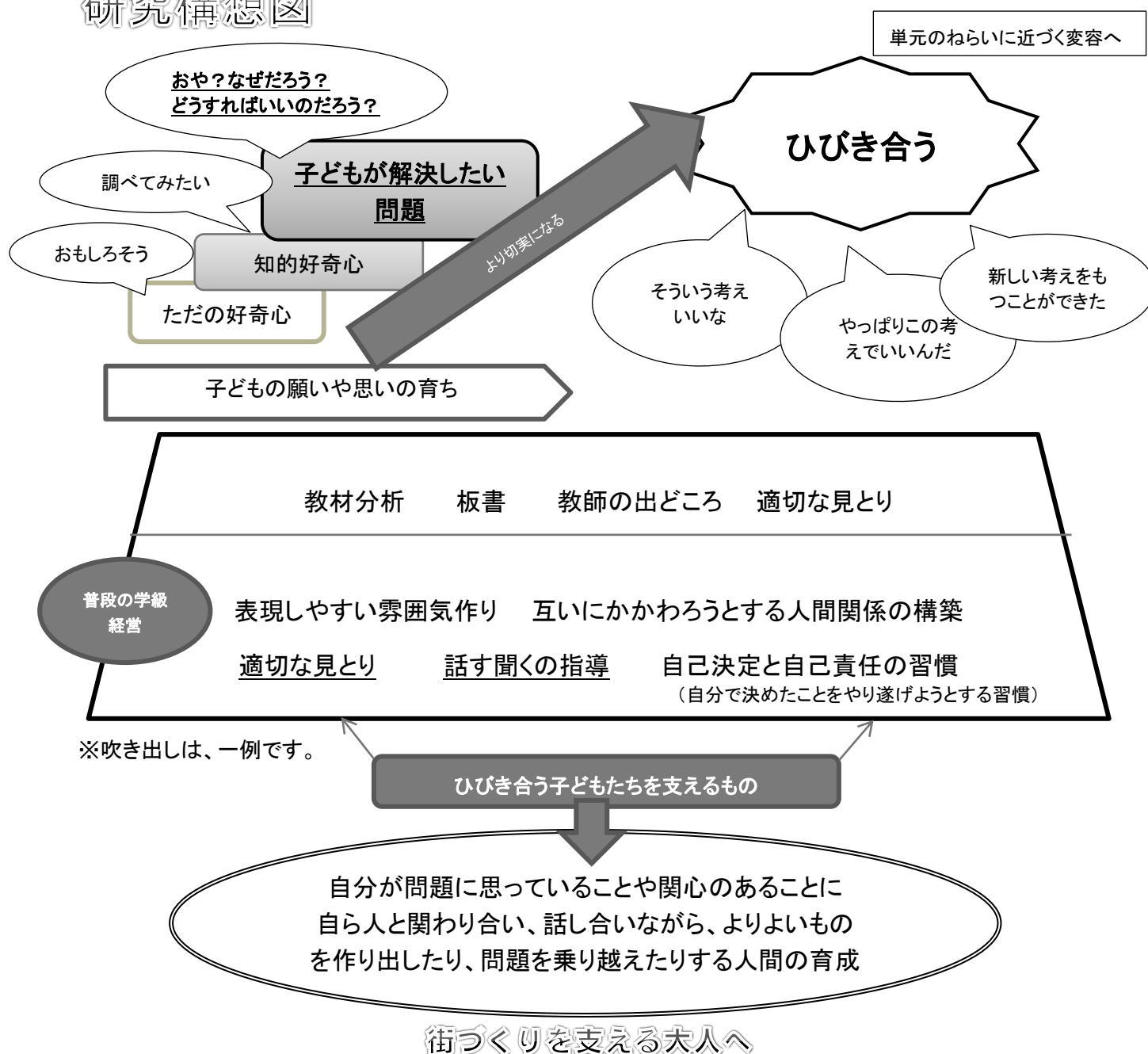
また「合う」は、子どもたちが「互いにそうする」という意味(三省堂国語辞典より)で、「合う」という表記を用いる。「助け合う」「話し合う」「認め合う」などと同じように、漢字表記にすることで、その意味を示す。

ブロックテーマ(どんな姿が見られたらよいか)

低学年	中学年	高学年	個学
感じる心、 素直に表現する自分 ・人の言動に何かを感じる姿 ・自分の思いや他者からの刺激を受け止め、素直に表現する姿	追究する力、 仲間と支え合う自分 ・自分の問題をとことん追究する姿 ・仲間と協働して追究する姿	仲間への理解、 自立する自分 ・仲間を理解しつつ、自分の思いも大切にする姿 ・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿	感じる心、 気持ちを伝える自分

* 昨年度反省にあがったように、小項目については、学年の実態に合わせて文言を変更するのも良い。また個学も必要に応じて変更し、ブロックテーマにせまる提案をしてよい。

研究構想図



(1) 研究課題と手だて設定の理由

本校の児童の実態として、安定した家庭環境の中で育ち、与えられる課題には素直に取り組む良い子が多い。勉強しようという気持ちがあるよさがある一方で、仲間と協働する意識が薄く、自らじっくり思考し、友だちと追究して解決したり、仲間とより良いものを生み出したりという力に欠ける。学校教育目標の中の「学ぶ力」として「主体的に思考し、共に深め合い、自己を磨く賢い子」を目標としているように、自ら思考し、互いに関わりながら、よりよい自分に高まろうとする力が、これからの未来を築く子どもたちに必要だと考える。

そこで、本研究では、子ども自身が問いを持ち、その問いについて「みんなで追究したい」、そのために「友だちの意見を聞きたい」「自分の考えを伝えたい」という気持ちをもって学習の場に臨む子どもたちを目指したい。そして、その学びの過程で、自分を変化させたり、新しいことを発見したり、考えを深めたりし、単元の狙いに近づく姿となり、「学び」として成立させることを目指す。

子どもたちが本当の意味で「ひびき合う」には、そこまでの思いと願いの育ちから生まれる子ども自身の「問題」がより切実になっている必要があると考える。そうした子どもたちの学びの過程を大切にするために、

- ①何と出会い、子どもの思いや願いをどう育て、どのように問題を子どもと創るか
- ②どのような学びの可能性があるのか
- ③どこで、どのようにひびき合いの場をつくり、ねらいに到達させたいか

といった学びの道筋＝指導の道筋を記す「単元構想づくり」を今年も手立ての一つとして大切にしていこう。単元構想は、子どもの実際の学びと共に、変化のあるものである。子どもの思考過程が予想と違うことがある。その時の子どもの思考過程に寄り添い、問題に思っていることはなんなのかを見とり、単元構想に加除・修正を加えながら、子どもと共に授業を創っていくことを目指す。

学びの道筋は、子どもが違えば、同じ単元でも同じ道筋をたどることはない。学級経営、担任、子ども……いろいろな要因がその時その時で異なれば、道筋も異なる。「こうすればこのようになる」という方法論的な研究ではなく、子どもの出方に対し、教師である自分が何をし、主体的な問題解決学習を実現させるのかは、互いに実践を見合う中で、また自分で実践を重ねていくうちに、自分なりの方法を見つけていくものである。

単元構想をつくるのは、とても労を要する。しかし、その授業一回だけのことでなく、単元構想を描くことを通して、そうした子どもの思考に沿い、子ども側から授業を捉える良さを知り、普段の授業に少しでもそうした授業を取り入れられるようにしていくことが「単元構想」を書く事の意味である。普段、好奇心を喚起するような導入を考える、こういう反応が来たら立ち止まる、のようなことにも、単元構想を描く教師の思考が十分に生かせることである。

(2) 研究方法

- ・研究授業(参観&実践)、学級経営検討会の開催
- ・全体研 3回 各ブロック一名ずつ → 小林先生来校
- ・12月までに1人1回授業公開 → (今年度は、各学年一本の授業公開にします。全体研を行ってない学年は、一本授業を創り、ブロック研で検討・協議してください。それ以外は、経験者研も含め、自主公開制にします。紀要は、自分の実践について全員書きます。)
- ・全体研3回とブロックの授業)は基本的に見に行く。(クラスの実態に合わせて対応してください)

今年は、年間で校内研究日を設定し、年度当初にどこで授業公開するかを決定する。公開日はずらすことは基本的にはしない。

事前に、打ち合わせの時間に、

- ①「子どもが、どんな思いで、どのような問題に向きあっているのか」
- ②「どのようなひびき合いの姿をめざしているのか」

を職員に話す。

- ・研究同人の参加・小林先生による指導・助言による研究の深化
- ・ブロック研の研究授業についての指導案検討は、ブロックや学年で行い(必要に応じて回数や時間をとってください)、よく検討する。

① 学級経営検討会

「ひびき合う」ために必要な土台づくりを重視し、「話す・聴く」のルールづくり(資料②)、互いにかかわりあおうとする関係づくり(資料③)、自分の思ったことを表現できる雰囲気作り、粘り強くやり遂げる習慣などについて、学級経営検討会で、話し合いをしていく。具体的な子どもの名前を挙げながら、具体的な方法を紹介し合いながら研鑽をし、土台作りをしっかりとできるようにする。

② 単元構想づくり<資料⑤>

- ・一度全員で、単元構想づくりについての研修をする。
- ・どこの場面なら、子どもの問題が切実になるのか、追究し、ひびき合うのかを、学年またはブロックでよく相談する。
- ・事前に(前もって)自分で作ってみて、学年やブロックで検討し、授業に臨む。
- ・授業では、指導案+単元構想+本時案・座席表

③ みとり

- ・**単元構想前**単元(もしくは年間)を通して、何人かを詳しく見とる。この子については、具体的な記録を取ったり(行動観察、成果物からの記録、写真)、学年やブロックでも普段から情報交換したりする。時折、クラスの様子を見合うなど、学年で交流したときの様子なども見とり、構想に生かす。
- ・**単元構想時**どんなことが、目の前の子どもにとって問題になりそうか、普段の学級での様子、興味関心などをよく見とって単元構想を描いていく。0次案を作り、学年で具体的な子どもの名前を挙げながら、検討していく。授業が進むと同時に子どもが今どう思っているのかを見とり、0次案を書き換え、N次案を作り、本時に向けて単元を構築していく。
- ・**本時に向けて**本時案には、座席表をつけ、座席表に、その単元の中での子どもの思いや期待する変容・ひびき合う姿を詳しく書けるようにする。〈ただ、全員について書かなくても、そのような見とりができるだけ多くの子に対してできるようにスキルアップを目指す〉。どの子をきっかけにひびき合っていくかを予想し、矢印などを書き入れる。また、気になる子や変容が見とりにくい子についても、どんな手立てをとっているのか、どう見とっているのか担任の意図や支援が見えると良い。
- ・**本時**「各ブロックのテーマ」と「ひびき合う姿を具体的にみとるために」(資料①)を参考にしながら、ひびき合いの姿をみとっていく。「全員が話しているかどうか」、ではなく、発言していなくても「どんな気持ちでともだちの話をきいているのか?」「友だちの考えをどう受け止め、自分に生かしているのか?」に注目して見とっていく。「ひびき合ったかどうか＝声を出したかどうか」ということではない。

<みとりの3点セット>→座席表に書くようにします。(座席表の書き方は後日提案)

- その子の前時までの姿。(★これまでの学習や生活の様子、★単元に入ってからの様子)
- 単元・本時に願う子どもの姿
- ②を実現するための具体的な手立て

④ 授業研究

- ・基本的には、国語、社会、算数、理科、生活、総合、生活単元学習。ただ、「ひびき合う姿」をどの教科でも実践できていくことが、研究が普段の教育活動に生かされることにつながるので、他の教科・領域でも提案できる。
- ・授業研究では、子どもたちが、自分たちの問題を解決していこうと、友だちとひびき合う場面をみあえるように

する。また、問題をもつまでのプロセスも教師として学びの多いところである。ブロック研や全体研で積極的にそうしたプロセスを学べる機会を持つことを推進したい。個学は実態に応じて、好奇心を喚起する場面や導入でもよい。

＜子どもがひびき合うまでのイメージ＞

(4) 子どもたち同士でひびき合おうとする。

私は～だと思う。だって…

なるほど…。
じゃあぼくは～だな。

～だから～なんじゃない？

子どもたち自身の問題について、解決のためにひびき合う。

(3) 子どもの知的好奇心が発展していく学習→その過程で子どもの解決したい問題が生まれる

もっと知りたいな。

この場合はどうだろう。

教材と関わる中で、
新たな問題が出てきたから学ぶ。

〇〇は～だ。じゃあ、□□はどうか

(2) 子どもの知的好奇心がスタートかつゴールの学習

みんな(自分)で決めたから
やりたいな。

みんなで、(私は)～をしたい

みんなで(私は)、～ができる
ようになりたいな。

そのために学ぶ

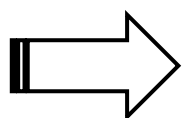
(1) 与えられた教材が知的好奇心を喚起し、子どものものとなる学習

おもしろそうだから、
やってみたい

やってみたらよかった。
もっとやりたい。

「先生が言ったことをやる」から「自分がやりたいから学ぶ」

外から与えられた好奇心が、自分の中から生まれる好奇心へと変わり、学ぶ。



どれがいいということではない。また、子どもから出たものでなければならないということでもない。子どもの問いが切実かどうかを教師がみとり、どう授業をつくるかが大切。教師・子ども・地域の個性を生かしてほしい。

⑤ 授業研究の視点

- ★子どもにとって解決したい問題が切実になっていたか。
- ★ひびき合っていたか。
- ★それを支える(みとり、学級経営、「話す・聴く」の指導、自己決定と自己責任の習慣、教材分析、板書、教師の出どころ)は、適切だったか？

の3つを中心に話し合う。話し合いは、授業での子どもの言動をよく観察し、発言・反応・活動・表現物から見とったことを話し合えるようにする。そのために、一人ひとりが授業記録や写真を取って話し合う。子どもの名前や様子が具体的に語られる研究協議になるようにする。
協議記録は分かりやすく、まとめる。

⑥ 研究構想を意識した授業の研究レポート～研究を日常に生かす～

「なんでこうなんだろう?」「えっ? どうして?」と子どもの知的好奇心を喚起し、「子どもの問題」が産まれるような授業を普段に取り入れた実践レポートを書き、互いに情報交換し合う。(A4 1枚程度)紀要にも生かせる形で書いて良い。提出は12月で冬休み前。年間を通して子どもを育てる意識で取り組む。

→ 本年度は行わない

⑦ 本年度の重点項目

昨年度末の反省から、今年度研究の重点項目としてやっていくことは以下の2点である。

・子どもを見とる力をつける＝「子どもを見とる視点をもつ」

子どもを見とるには、子どもを見とる視点を持っていないと、見えてこない。授業の中で、今どんな気持ちで、何を考えているのか? などをつぶさに見とり、「誰をすくい」「誰を生かし」「誰を拾う」のか? を考えてその場で授業を組み立てていくには見とりが必要である。そのためにも、本年度は、夏にワークショップ的な研修を行い、見とる視点を創っていく。

・「ひびきあい」のノート指導

- 子どもがひびき合うための土台として必要なノートとは?
- 子どもがひびき合ったことを残すことのできるふり返りの書き方は?
- 子どもがひびき合いながら、思考を書き留めるためのノートとは?

授業の中で、子どもが、いつ、どのように、ノートを活用すると「ひびき合い」に有効なのか? を考えることが大事であることが研究の積み重ねから分かってきた。このノートのあり方を、いろいろな実践で試行錯誤し、それぞれやってみた物を持ち寄って情報収集する。来年度、この情報収集した物をもとに、整理分析していく。(2年計画)

(3) 研究組織

低学年ブロック	中学年ブロック	高学年ブロック
岩本 江上 幾左田 池上 中山 大津 浅川 富岡 西田	大川 長山 和栗 菰原 中川 伊瀬谷 木村 森 垂水	山崎 飯山 加藤 岩永 中田 柴田 北村 教頭

校長・真壁 T・鈴木 T は、必要に応じて巡回してください。

(4) 研究日程
(別紙参照)

(5)まとめ方(冬休み前詳細を出します)=HP 上での紀要公開

＜学年代表で授業提案した方＞

「指導案」「単元構想」「本時案」「本時の様子」「その後の実践、学級の子どもたちの育ち(ブロックテーマに照らし合わせて)からいえる成果と課題」などを紀要にまとめてください。

＜その他の方＞

「学年で検討したブロック研や全提案体研の単元構想を、自分のクラスでやってみる」「本校の先行研究の単元構想を生かして単元を実践する」「自分で新しく実践する」などします。自分のクラスに合わせた「単元構想」「本時の様子」「その後の実践や学級の子どもたちの様子からいえる成果と課題」などを紀要にまとめてください。